

景観利益の制度的保護の可能性に関する研究 －国立駅前大学通りの景観訴訟の事例を通して－

日大生産工(院) ○菅原 雄太 日大生産工(教授・博士(工)) 川岸 梅和
日大生産工(非常勤・博士(工)) 坪井善道

1 研究の背景

平成16年12月に施行された「景観法」は、都市・農村漁村等における良好な景観の形成を促進、美しく風格のある国土の形成、うるおいのある豊かな生活環境の創造及び個性的で活力のある地域社会の現実を図ることを目的とし、景観に関する国民共通の基本理念や国、地方自治体、事業者、住民それぞれの責務を定めるとともに、行為規制や公共施設の特例、支援の仕組み等を定めた法律であり、景観の意義やその整備・保全の必要性を国政の重要課題として明確に位置付けるとともに、地方自治体の今までの取り組みの弱点を補い、支えていくことが可能な仕組みとなっている。また景観法では、景観の意味はいまいであり明確に定義されていない。

2 研究の目的

国立に関する既往研究では、住民のみの評価結果を対象にした地域景観像の形成¹⁾に関する研究などがあるが、国立居住者以外の人に関する景観評価に関する研究はない。本研究の目的は、①人は景観に対しどのような印象を持つのか、②人により重要視している項目に違いはみられるのか、③法的に保護される景観というものは何が重要視されているのか、さらに④一般地域で法的保護を受ける景観のための条件を導き出すこと、とする。本稿では、先ず上記の①、②について景観評価実験を通し考察する。

3 調査対象地区選定

東京都国立市にあるJR国立駅から南へ伸びている大学通り(東京都道146号)を対象地として選定した。選定理由は、近年おきた主な景観訴訟25例の中から、援用や判断基準と

されるなど12例の判決に大きな影響を与えることとなった「国立駅前大学通りの景観訴訟」がおきた場所なため選定した。

4 心理量分析(SD法)

4-1 分析方法

心理実験は、国立駅前大学通りにて歩行者・通り沿いの住民・駅前周辺・訴訟のおきたマンション周辺でアンケート調査を行った。評定尺度は、景観に関連するものを広く収集し、その中から15尺度を選出し7段階評定によるSD法の評定実験を行った。(被験者：50名(属性などによる被験者数の配分を考慮に入れ108名から選出)。アンケート調査をおこなった50名を、①居住地別(国立市居住者、国立市以外居住者)・②年代別(10～50代以上)・③性別(男性、女性)に分類し、それぞれのグループがどのような傾向にあるのかを考察していく。

平成23年 月 日

国立大学 学部 学号

アンケート調査

1. 国立市の居住者ですか () ()
2. 性別 (男性・女性)
3. 年齢 (10代・20代・30代・40代・50代以上)
4. 職業 (学生・自営業・公務員・会社員・その他)

景観要素	非常に重要	重要	やや重要	やや重要でない	重要でない	非常に重要でない
落ち着いた景観						
明るい景観						
清潔な景観						
質の高い景観						
静かな景観						
対外的景観						
洗練された景観						
自然な景観						
趣のある景観						
高貴な景観						
暖かい景観						
景観の質						
景観の量						
景観の質と量						
景観の質と量						

ご協力ありがとうございます。

図1 アンケート用紙

4-2 景観評価実験の結果

国立駅前大学通りの標準偏差を記したプロフィールと、各形容詞対における居住地別・性別・年代別の平均値と、標準偏差を記したプロフィールを図2～5に示した。

Study on the Possibility of Legal Protection for the
Benefit which arise from to saver the proper Landscape
-A Case Study on the Lawsuit concerning Landscape of University Mall which
located in front of Kunitachi Station-
Yuta SUGAWARA, Umekazu KWAGISHI and Yoshimichi TSUBOI

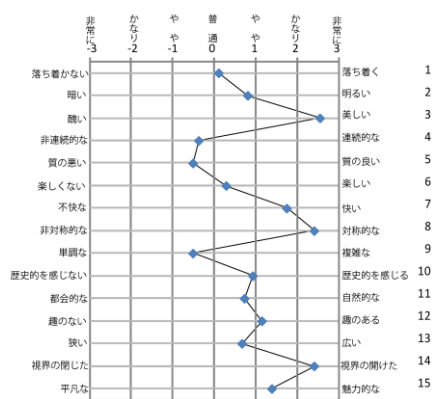


図2 国立大学通り評価平均値プロット図

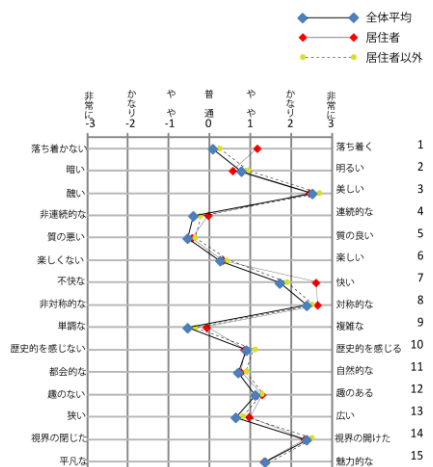


図3 居住地別評価平均値プロット図

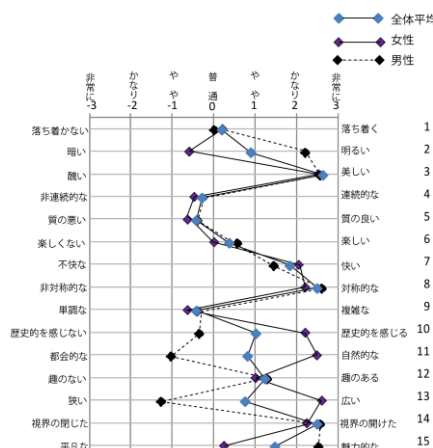


図4 性別評価平均プロット図

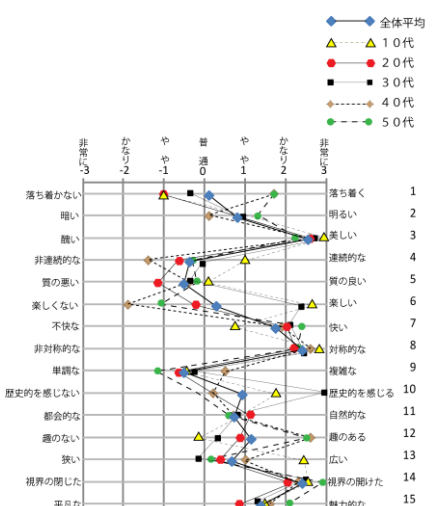


図5 年代別評価平均値プロット図

表2から目立った形容詞対としては、「美しい」、「対称的な」、「視界の開けた」があることがわかる。全体的に視覚から得られる情報が多くみられる傾向にある。次に評価の良い形容詞対として「快い」、「魅力的」となっていることがわかる。これは並木道を歩いていくことで体験することのできる空間の性質からきていると考えられる。

表3から国立市居住者と国立市以外の居住者の関係をみていくと、両者とも全体の平均値が一致している。これは景観の判断基準に居住地は特に影響されるものではないと考えられる。また、国立市居住者と国立市以外居住者で違いのみられた項目は「落ち着く」、「快い」であり、国立市の居住者は国立市以外の居住者よりも比較的長い時間、国立駅前大学通りを体験することが予想できるので、空間を体験することでわく心情的な面が少し強く出たのだと考えられる。

表4からは「明るい」、「歴史を感じる」、「自然的な」、「広い」、「魅力的な」の5項目に全体平均との違いが見られた。女性の場合、「明るい」、「広い」の2項目から空間の安全面にも注目していると考えられる。「明るい」がマイナスより出ている要因で考えられるのは、緑地帯の部分や商店がある地域を外れたところでは街灯の光が届かない部分もあり少し暗い印象があるためと考えられる。「広い」は、大学通りが幅員約40メートルであり車道、歩道、自転車道、緑地部分と分かれているので車両を気にせずに歩けること、被験者の女性の大半が小さな子供のいる人だったのでこのような結果になったと考えられる。男性の場合、「明るい」がプラスに、「歴史を感じる」、「自然的な」、「せまい」がマイナスに違いがみられる。これは、通りに若者向けの店舗が多くみられ、どちらかというと賑やかな都会的な雰囲気があること、駅周辺では自転車歩道にはみ出していたりすることが要因であると考えられる。

表5からは、「落ち着く」、「楽しい」、「歴史を感じる」、「趣のある」の4項目に違いがみられた。まず10代の場合、「落ち着く」、「趣がある」がマイナス寄り、「楽しい」がプラスよりにみられる。これは、通りに若者向けの店舗が多いことなど賑やかな空間があることが考えられる。10代は、全体的にみて「美しさ」や「歴史を感じる」といったことだけではなく、「楽しい」などがプラス寄りになっていることから通り全体の評価ではなく、通りに付随している空間、もしくは施設の評価が景観評価に影響を及ぼしている傾向にあると考えられる。20代の場合、ほぼ全体平均と変わらない値である。あまり目立った傾向はみられなかった。

30代の場合、「歴史を感じる」に全体平均との違いがみられた。アンケート全体をみても「歴史を感じる」が最もプラス寄りに示されたのが30代のグループである。アンケート調査の際に、「歴史を感じる」にプラス寄りにした人のヒアリングから考察していくと、まず並木道に歴史を感じる、もしくは国立市の住民で昔から住んでいて愛着があるなど理由は様々であった。一概に歴史といっても国立市自体の歴史性だけではないと考えられる。40代の場合、「落ち着く」、「楽しい」、「趣のある」に全体平均との違いがみられた。「落ち着く」、「趣のある」がプラス寄りに示されている要因としては、沿道に配置してあるベンチなどで話している光景がみられたこと、通り沿いを散歩している人がみられたことなどがある。これも実際に国立駅前大学通りを体験することで得られる感情であり、国立市に居住している人の方が若干強くその傾向がみられる。「楽しい」がマイナス寄りなのは、通りを歩いている分には、木々の木漏れ日などが気持ちいいが、通りにある店舗・施設が若者向けのものが多いために少しマイナス寄りであるのではないかと考えられる。50代の場合、全体的にみても40代の平均と違いは少なく、40代以降は同じような評価軸をもって景観を見ていると考えられる。居住地別、性別、年代別で比べていった結果、居住地別の場合は空間の体験する時間が評価に影響を及ぼす場合があること、性別の場合は被験者の家族構成なども評価に影響を及ぼすこと、年代別の場合は、若いうちはその空間を構成する要素(店舗・道路・ベンチなど)が景観評価に影響し、年を重ねるにつれて通り全体の雰囲気などが評価に影響を及ぼすということが考えられる。

4-3 因子分析による評価特性の把握

因子分析に取り込む変数(形容詞対数)を共通性より7項目に絞り込み、因子負荷量を求め、因子寄与率及び固有値から第3因子までの因子軸を解釈した(表1)

表1 因子負荷量及び固有値表

変数名	プラス側	マイナス側	因子No.1	因子No.2	因子No.3
10 歴史を感じる	歴史を感じない	0.60011	0.34119	0.18739	
11 自然的な	都会的な	0.94305	-0.09748	-0.00723	
13 広い	狭い	0.82136	-0.05195	-0.08538	
4 連続的な	非連続的な	-0.06482	0.96134	0.22443	
6 楽しい	楽しくない	-0.08625	0.37831	-0.04399	
7 快い	不快な	0.016205	0.003081	0.95423	
12 趣のある	趣のない	-0.17382	-0.63203	0.68423	
	固有値		2.15296	1.68278	1.45754
	寄与率		30.76%	24.04%	20.15%
	累積寄与率		30.76%	54.80%	74.95%

- ① 第1因子：「視覚情報評価因子」
- ② 第2因子：「空間構成評価因子」
- ③ 第3因子：「感情性因子」

- ① 第1因子：「視覚情報評価因子」

「自然的な—都会的な」、「広い—狭い」の視覚情報から得られる2項目の因子負荷量が大きいことから命名した。

- ② 第2因子：「空間構成評価因子」

「連続的な—非連続的な」の因子負荷量が大きいこと、「楽しい—楽しくない」の項目があることから命名した。

- ③ 第3因子：「感情性因子」

「快い—不快な」、「趣のある—趣のない」の2項目の因子負荷量が大きいことから命名した。

4-4 因子負荷量と分類別グループとの関係

次に因子負荷量と分類したグループとの関係をみていく。

- ① 第1因子(視覚情報評価因子)

表2 第1因子・因子得点最高値

居住地	性別	年代	因子得点
国立市	女性	10代	1.188486
国立市以外	女性	30代	1.185248
国立市	女性	20代	1.142943
国立市	女性	50代	1.135239
国立市以外	女性	30代	1.110567

第1因子の因子得点が高い5項目を選出した。年代関係と居住地は関係なく女性が視覚情報による景観評価を重要視していることが表2からわかる。図4の性別評定平均プロット図からもわかるが、女性は高く評価したものは第1因子でまとめて説明することができる。

- ② 第2因子：「空間構成評価因子」

表3 第2因子・因子得点最高値

居住地	性別	年代	因子得点
国立市	女性	10代	1.755176
国立市	女性	20代	1.601559
国立市	男性	30代	1.347285
国立市	男性	10代	1.336849
国立市以外	男性	10代	1.270859

第2因子の因子得点が高い5項目を選出した。居住地、性別は関係なく年代は10代から30代の人が空間構成による評価因子を重要視していることが分かる。

- ③ 第3因子：「感情性因子」

表4 第3因子・「感情性因子」

居住地	性別	年代	因子得点
国立市	男性	40代	0.739681
国立市	女性	40代	0.738789
国立市	女性	50代	0.733901
国立市	女性	40代	0.731937
国立市以外	男性	50代	0.728589

第3因子の因子得点が高い5項目を選出した。性別、居住地関係なく40代以降の人が感情性因子による景観評価を重要視していることがわかる。

5 まとめ

今回の実験において全体的にみると、景観の判断基準はその空間を体験して得ることのできる感情的なものよりも視覚から得られる情報のほうが重要視されていると判断できる。そのため「美しい」、「対称的な」、「視界の開けた」という項目が評価の高い結果になっている。これは国立駅前大学通りの特性である対称的に並び見上げると空しか見えなくなる並木道が影響を与えているものであると考えられる。また、「快い」、「魅力的」という項目が次点にきていることから一目見て良い景観とわかることに加えて、実際にその空間を体験することで得られる感情的なものも必要であると考えられる。

居住地別の景観に対する判断基準は今回の実験では得ることができなかった。国立居住者の場合、以前からいわれている住民に明確な景観像が形成されているということも、視覚情報から得られる景観の良いところと、空間体験によって得られる感情から成り立っているのではないかと考えられる。国立市居住者の方が若干ではあるが感情に関係する要素が大きかったので、この感情面での評価基準を突き詰めていくことで居住地別の景観判断基準がみえてくると考えられる。

性別の場合、女性は視覚情報に重要視した景観評価をしている結果が出た。この結果は、空間の構成要素と女性自身の環境に関係があると考えられるのでより具体的な答えを出していく必要がある。男性の場合、並木や感情的な要素だけでなく地域にある店舗・施設など人工的であったり、利便性があるものも景観の判断基準に加えていると考えられる。

年齢別の場合、10代・20代は通りそのものが良いと感じているよりもそこにある施設や店舗、公園など自身が体験すること、言い換えれば対象となる空間の機能的な面を重要視して景観の判断基準をもっていると考えられる。30代は、「歴史を感じる」といったことを重要視している結果になったがその要因は人それぞれで、並木道自体に歴史を感じるという「自然的な」に近い第1因子(視覚情報因子)を重要視している場合と、国立市の居住者でその土地に住んで長い時間国立駅前大学通りを体験することでわいてくる第2因子(感情性因子)を重要視しているなど、一概に歴史性というくくりにはできない印象をもった。40代以降の景観評価基準は、視覚から得られる情報よりも、自身が体験することによって得られる第3因子(感情性因子)が重要視されている。10代、20代とは違い個々の通りの機能ではなく通り全体としての雰囲気や体験を判断の基準としていると考えられる。全体を通しては、視界が開けて見える空や、並木道の自然、広く

安全な道路、空間自体の雰囲気などが評価をプラス寄りにしていた。また、空間の楽しさや賑やかさなどは空間の構成要素によってはマイナス面に働いてしまうことも判断できる。楽しさや賑やかさなどは、通り全体の要素よりも通りにある個々の機能部分に依存している可能性があることが考えられる。国立大学駅前通りに行くとまず目に留まるのが、並木道である。桜の名所としても有名でこの大学通りの発展が国立の発展となるような場所でさえ一番目立つものだけが景観の判断基準として成り立っているわけではなくそこに付随する空間体験や施設、人の感情性などが相まって景観というものは判断されると再認識した。今回の心理実験だけでは明確な人による景観評価の判断基準を得ることができなかった。より具体的な答えを求めることによって違いが出てくるのではないかと推察できる。この判断基準が分かることで法的に保護される＝良好な景観と、その良好な景観を形成している要素、条件などがわかることで一般的な地域も魅力のある空間に作り替えることが可能になるのではないかと考えている。

6 今後の課題

・1つの形容詞対でも人によって捉え方が違うのでより具体的な回答ができるものが必要である。さらに変数(質問内容)や分類の分け方などを再度考慮していく必要がある。

・より具体的に今回の結果を説明するために、記述式のアンケートなどを用いて判断を用いて分析する必要がある。

・アンケートの被験者も住民、一般人だけでなく建築を学ぶ人の評価基準も合わせて判断する。

・今回の因子分析の結果は心理量の結果のみなので空間の構成要素など物理量の面から分析をし、因子分析の結果と合わせて判断することで、より明確な判断基準がわかると推察される。また、SD法による因子分析は、形容詞対の選択方法、分析者の操作性などが影響するため、他の手法を用いることによって評価結果を検証してみることも必要である。

参考文献

- 1) 内山隆史：「地域景観像の形成過程に関する研究～国立市大学通り周辺を事例として～」
日本建築学会大会梗概集，2004，8
- 2) 石原一子：「景観にかける 国立マンション訴訟を闘って」(新評論，2007)
- 3) 石井一郎，元田良孝：「景観工学」(鹿島出版会，1990)